広報なばり
市政と暮らしを結ぶ情報紙
6－2号 No.912
毎月4回発行(日曜日)
ケータイHP
2011年(平成23年) 6月12日発行

主な内容

1～2……派遣職員などによる被災地派遣リポート
3……節電に取り組もう、台風・大雨に備えてのチェックポイント
4……新コーナー「もしも、災害の一日前に戻れたら…」

発行／名張市企画財政部広報対話室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1 ☎0595-63-7402 pr@city.nabari.mie.jp HP http://www.city.nabari.lg.jp

被災地派遣リポート

派遣職員などがみた被災地の状況や学んだこととは―

宮城県塩竈市 避難所運営やガレキの撤去などに従事

松村 大介（危機管理室）

宮城県塩竈（しおがま）市の避難所となっている公民館で、被災者の受付や食事の準備、支援物資の受付、宿直など避難所の運営にかかわり、また、津波の被害が深刻な離島でガレキの撤去作業にも従事しました（5月1日～14日／第1班）。

塩竈の市街地にある避難所は1ヵ所に集約され、派遣期間中に避難者が仮設住宅に移っている状況でした。その一方で、離島の避難所では行政の支援も届きにくいこともあり、区長を中心に、生活のルールづくりや行政との連絡など自主運営がなされていました。

塩竈市の防災担当者によると、避難者は想定の約3,000人を大幅に上回る約9,000人となり、また、市指定避難所以外にも集会所など自主的な避難所ができたといいます。さらに、避難所へ行かなかった自宅避難者を含めると、到底行政だけでは、きめ細やかな情報発信や支援物資の提供などができない状況だったそうです。災害時における地域の果たす役割を再認識するとともに、地域や施設管理者、市が連携して、事前に避難所運営のルールづくりや避難所運営訓練をしておく必要性を感じました。もちろん、地域で普段から「顔の見える関係」を築いておいていただくことも大切です。一方で、災害発生時、行政として最も重要なのは、迅速に情報を把握・整理すること。そして、率先して行動に移していくことだと学びました。

道路に散乱したガレキを撤去

被災者の受付など避難所運営に携わる

作業の合間を見て塩竈市以外にも被害の大きかった地域を実際に見て回りました。離島では、妻の遺体を自身で見つけたという被災者の話に衝撃を受けました。そして、わたしの携わる「防災」という業務は〝命にかかわるもの〟と改めて強く認識しました。今後も、市民の皆さんと一緒になって、しっかりと取り組んでいきたいと思います。

市の支援状況

写真：緊急消防援助隊 3月14日／宮城県仙台市

人的支援

3月11日～21日	緊急消防援助隊派遣（1次～4次隊）～宮城県仙台市など <のべ25人>
4月5日～9日	保健師派遣～岩手県陸前高田市<1人>
5月1日～7月31日（短期派遣）～9月30日（長期派遣）	市職員派遣～宮城県塩竈市<避難所支援業務など短期派遣 のべ70人> ※予定 <被災状況調査など長期派遣 のべ10人 > ※予定
5月6日～10日	医療救護班派遣～岩手県陸前高田市<医師1人、看護師2人、事務職員1人>

物的支援

3月14日	市庁舎、市社会福祉協議会などに義援金募金箱を設置
3月14日	市の備蓄品（毛布800枚）を宮城県に向け搬送
3月18日～4月30日	市民からの救援物資を受入れ、搬送
3月18日	被災者向けに市営住宅の提供開始（6戸・家賃無料）

岩手県陸前高田市 市立病院 医療救護班として患者を診察

写真左から
須藤 博明（市立病院医師）
生田 耕一郎（市立病院看護師）
中岡 範子（市立病院看護師）
籠井 昭彦（市立病院事務職員）

症状などを聞き取る中岡看護師

【須藤医師】

岩手県陸前高田市で、秋田県や東京都の医療関係者とともに、患者の診察や薬の処方などを行ってきました（5月6日～10日）。

拠点診療所となっていたコミュニティセンターには、1日100人程度の患者が受診。その多くは高齢者で、風邪や胃腸炎、そして、高血圧や糖尿病など慢性疾患の患者が多かったですね。中には、心のケアが必要な人やガレキ撤去でケガをした人もいました。また、センターにはレントゲンなどの一部の医療機器はあるものの、水道がなかったのが特に大変で、アルコールなどで代用しました。

医師も震災で亡くなっている中、長期的な医療支援が必要かもしれません。また、今回は、非常時の体制での診察となりましたが、いかに医療関係者の連携が必要かを痛感。チーム医療の大切さに改めて気付かされました。

【生田看護師】

現場では、即戦力が求められました。診療体制が整っていないからといって「これはできない」と言っていられない。どんな状況でも対応できる看護師が必要だと強く感じました。

【中岡看護師】

親族が津波で流されるなど深刻な状況に置かれている人もいて戸惑ったこともありました。でも、じっくりと話を聞かせていただくだけでも、〝とても落ち着いた〟という人が多かったです。今後も、患者さんの話をよく聞き、心のケアができる看護師を目指していきます。

【籠井事務職員】

拠点診療所では受付のお手伝いをし、市立病院医療救護班の一員として患者や地域の皆さんと接することを心がけました。

【2ページへ続く】

引き続きご協力ください 東日本大震災 義援金

5月31日までに市にお寄せいただいた義援金の累計金額は、**4,514万3,227円**。随時、日本赤十字社や三重県共同募金会へ送金しています。市内の主な公共施設に募金箱を設置していますので、引き続きのご協力をよろしくお願いします。

岩手県陸前高田市　避難所での健康チェック

小林 由美子（健康支援室）

避難所で被災者から話を聞きながら健康チェック

岩手県陸前高田市で、三重県から派遣された2人の保健師とともに、3ヵ所の避難所や数件のご家庭を巡回し、健康チェックや感染症予防を行ってきました（4月5日～9日）。

被災者の皆さんからは〝遠いところから来てくれた〟と感謝いただくなど、暖かく穏やかな人が多いと感じました。でも、そんな皆さんは、家を流されたり、ご家族の遺体が確認できていなかったり、今後の生活に不安を感じておられました。それだけに、心のケアが必要な人を把握し、医療支援チームにつなげることも重要な業務でした。

避難所は集団生活ですので、感染症が蔓延しやすい状況だったと言えます。また、市内ではインフルエンザが発症している避難所もあり、マスクやアルコール消毒の徹底を一人ひとりに訴えかけたりもしました。

保健師としてできることに精一杯取り組み、現地で活動する中で、一人ひとりに寄り添い、耳を傾けることの大切さを実感しました。「明日も待ってるからね」。そんな被災者の皆さんの声は忘れられません。

宮城県仙台市　危険と隣り合わせの捜索活動

藤岡 義信（市消防本部）

津波の情報が入り、民家の屋根に緊急避難

三重県緊急消防援助隊として、宮城県仙台市で生存者を捜索しました（3月11日～15日／1次隊）。

活動を始めようとすると〝5mもの津波が来る〟との無線連絡が入りました。活動現場は、海岸から3㎞圏内でしたが、避難すべき高台がない。隊員は民家の屋根に急いで避難しました。結局、誤報であったため、津波は来ませんでしたが、その際、「津波が来ればもう仕方がない」と覚悟しました。

さらに、度重なる余震や原子力発電所が危ないといった情報が飛び交う中、みんなで「一人でも多く救助しなければならない」と励ましあって活動を続けました。最終的に三重県隊としては、16体の遺体を収容するなどしました。

時間の経過とともに、救助隊が人命救助をすることはやはり難しく、災害時の初動体制としての自助・共助の重要性を再認識しました。また、津波による被害だったこともあり、どこを捜索すればよいか分からない状況。結局、効率的な捜索はできませんでした。名張で大規模災害が起こった場合を考えると、地域の中でどのような人がいるのか把握されていることで、より円滑な救助が可能になると思います。

宮城県塩竈市　被災状況を調査

冨澤 一郎（下水道建設室）

宮城県塩竈（しおがま）市で、道路（市道）の被災状況の調査を、2人1組で行ってきました（5月1日～6月2日／第1班）。

阪神・淡路大震災以降、耐震化が進められてきた橋の被害は少ないのですが、道路の被害が目立ち、塩竈市の市道は、約700路線のうち半数以上に、地震によるひび割れや陥没といった被害がみられる状況です。一方、塩竈市の職員は、震災から1週間程度、市役所で泊まり勤務。その後も、膨大な業務に追われ、かなり疲弊しているようでした。そうした中、わたしたちは、1日に10㎞ほど市道を歩いて被害の概要を調査したり、市道の災害査定に必要となる具体的な道路の復旧計画を作成したりしました。

市道の災害査定業務は1年間ほど必要で、その後3年を目標に道路工事が行われる予定です。しかし、人手が足りない中、5月末で災害査定が済んでいるのは15路線。道路の復旧はまだまだこれからです。今後も機会があれば、被災地の復旧・復興に力を尽くしたいと思います。

離島での調査作業

被災地の現状

村上 昭弘（あきひろ）さん※（宮城県塩竈市防災安全課）

塩竈市の沿岸部は、津波で大きな被害を受けましたが、ライフラインはほぼ復旧し、市街地のガレキ撤去や被災家屋の片付けなども、のべ6,500人ものボランティアの皆さんのご協力などにより収束しつつあります。ただ、塩竈市内の離島や近隣の市町の被害状況は深刻で、復旧の目処が立っていないのが現状です。

塩竈市内では、名張市をはじめ17の自治体の皆さんに避難所の運営などに尽力いただいています。被災状況の調査をはじめ、震災関係の膨大な業務で塩竈市の職員が足りない中、大変助かっています。ぜひ、ここでの経験を各自治体での防災対策に生かしていただきたいと思います。

復興に向けて塩竈市民の要望を調査していく必要がありますが、雇用を守るためにも、企業への支援を早急に行う必要があると考えています。今後も、国をはじめ、全国の皆さんの協力をいただきながら、震災からの復旧・復興に全力を尽くしていきます。

深刻な津波の被害を受けた塩竈の離島

※被害・復旧状況や村上さんの所属などは取材時（5月13日）のものです。

皆さんの暖かいご協力ありがとうございました

1,412箱分の支援物資

市民の皆さんのご協力により、支援物資は、3月18日から4月30日までで、紙おむつ（約1,600パック）やトイレットペーパー（約1万ロール）など、段ボール箱で1,412箱分になりました。これらは、3月以降順次、宮城県庁や宮城県岩沼市、岩手県宮古市、福島県南相馬市へ送付させていただきました。

なお、144人ものボランティアの皆さんに支援物資の受入れや整理にご協力いただいたほか、事業所の皆さんには、無償で段ボールを提供いただいたり、被災地まで配送していただいたりと、多くの皆さんにご協力いただきました。本当にありがとうございました。

「自分でできることを何かしたい」と支援物資の受入れに参加

中山 弘美さん（つつじが丘南2）

支援物資受付当初、早速おむつを持参しました。さらに、受付や仕分けなど自分にできることなら何でもしたいと感じ、ボランティアとして参加することになりました。

現地は寒いだろうと手編みの靴下を持参されたお年寄りもおられました。受付品目が決まっているため、お断りさせていただかなければならず残念でしたが、たくさんの支援物資からこうした皆さんの暖かい気持ちが伝わってきて、とてもうれしく感じました。今後も、できる範囲で支援活動を続けていきたいですね。

◎名張市災害ボランティア支援センターでは、東日本大震災の被災地でボランティア活動ができる人や、県内、市内でボランティア活動に参加できる人の事前登録を行っています。登録者には、必要とされているボランティア情報を提供します。詳しくは、名張市社会福祉協議会（☎63-1111）へ